The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「古典芸能鑑賞入門」授業の取り組み
Author(s)	柴田, 芳成
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2014, 12, p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/50785
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「古典芸能鑑賞入門」授業の取り組み

柴田　芳成

【要旨】

本センターで開講されている日本文化関連授業のうち、稿者の担当する研究科目「日本文学研究（古典芸能鑑賞入門）」について、授業の進め方を紹介するとともに、学生はどのような関心をもって受講しているのか、また授業を通してどのような感想をもつのかを報告し、日本文化教育のあり方を検討する材料の一つとしたい。

1．授業のスケジュール

半期間の授業は、おおよそ下記の内容で行っている。

1．ガイダンス（授業の進め方、古典芸能の種類などを説明）、アンケート（後述）
2．落語（歴史など、鑑賞―饅頭こわい or つる―）
3．狂言1（歴史、用語の説明など、鑑賞―附子or 棒しばり―）
4．狂言2（鑑賞―茸―）・能1（歴史、用語の説明など）
5．能2（鑑賞―羽衣、船弁慶―）
6．文楽1（歴史、人形の説明など、鑑賞）
7．文楽2（鑑賞・世話物―曽根崎心中―）
8．文楽3（鑑賞・時代物―鎌倉三代記 or 金閣寺―）
9．歌舞伎1（歴史、種類の説明など、鑑賞・舞踊劇―鷺娘―）
10．歌舞伎2（鑑賞・時代物―矢の根―、世話物―封印切―）
11．歌舞伎3（鑑賞・現代的な作品―野田版研辰の討たれ―）
12．くらべてみよう1（曽根崎心中―文楽と歌舞伎と映画―）
13．くらべてみよう2（女殺油地獄―文楽と歌舞伎と映画―）
14．くらべてみよう3（土蜘蛛―能と歌舞伎―）
15．その他（上記以外の芸能―雅楽、備中神楽、壬生狂言など―）

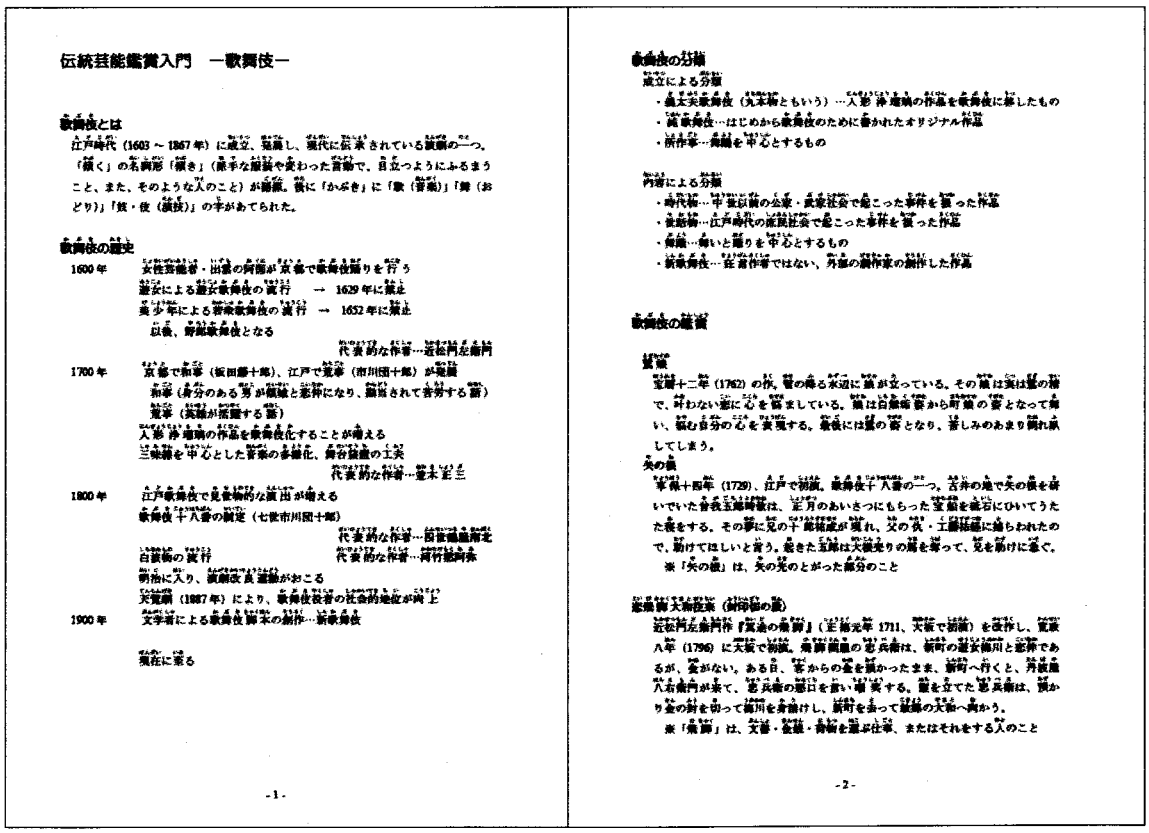
第1回目に授業全体の進め方について説明し、第2回目以降、落語、能・狂言、文楽、歌舞伎を取り上げて1～3回ずつ解説と鑑賞を行う。各芸能を一通り学んだ後で同一の物語を異なる芸能で比べて見るということを行っている。同一作品を見ることによって、それぞれの芸能の特徴が把握しやすくなるのではないかと考えてのことである。なお、上には各芸能の中で紹介する演目も記したが、主として秋学期の内容を示した。春学期にも続けて受講する学生がいる場合もあり、そのときには鑑賞作品を適宜入れ替えている。

この授業は、中級向け科目として設定されており、日本の代表的な伝統芸能についての基礎知識を広く（浅く）習得することを目標としている。レベル設定としては、能・狂言の場合、大まかな歴史、番組、用語などの解説は行っているが、専門的な内容には及ばない。たとえば、世阿弥について、室町時代に将軍足利義満の後援を受けた人物で、『風姿花伝』を著した能楽の

大成者であると紹介する程度であり、その生涯や能楽論などの詳細にはふれない。文楽、歌舞伎も同様に、その芸能の誕生から発展、近代を迎えて以降、現代までのあり様などを説明してゆく中で、重要と思われる事項（目安としては、高校で使用する国語便覧や歴史教科書の文化記事に見られる語彙）を取り上げて解説する。文字や言葉だけでは説明の行き届かないところがあるので、作品鑑賞だけではなく、歴史や種類の説明などにも、可能な限り、映像資料を用いることにしている。

各芸能について、上記のような解説を行ったあと、ビデオ・DVDによって作品を鑑賞する。作品鑑賞にあたっては、各種ガイドブック、解説書なども使用しつつ、物語全体の梗概を確認したあと、映像を観る。古典芸能の場合、作品全体を見ようとすると、授業時間内に収まらないものがほとんどであるので、作品を見る際には、物語の各段の中心となる場面を10～15分程度に区切り、それらを順に見て行くことになる。その途中で、映像を一時停止して、衣装や化粧の意味、見所などの説明を加える。

（参考）授業での配布プリント例



伝統芸能鑑賞入門　―歌舞伎―

歌舞伎とは

江戸時代（1603～1867年）に成立、発展し、現代に伝承されている演劇の一つ。「傾く」の名詞形「傾き」（風変わりな言動や変わった言動で、目立つようにふるまうこと、また、そのような人のこと）が語源。後に「かぶき」に「歌（音楽）」「舞（おどり）」「技（演技）」の字があてられた。

歌舞伎の歴史

1600年　女性芸能者・出雲の阿国が京都で歌舞伎踊りを行う
遊女による遊女歌舞伎の演行　→　1629年に禁止
美少年による若衆歌舞伎の演行　→　1652年に禁止
以後、野郎歌舞伎となる
代表的な作者…近松門左衛門

1700年　京都で和事（坂田藤十郎）、江戸で荒事（市川団十郎）が発展
和事（身分のある男が色恋と悲哀になり、繊細さで表現する芸）
荒事（英雄が活躍する芸）
人形浄瑠璃の作品を歌舞伎化することが増える
三味線を中心とした音楽の多様化、舞台装置の工夫
代表的な作者…近松門左衛門

1800年　江戸歌舞伎で見世物的な演出が増える
歌舞伎十八番の制定（七代市川団十郎）
代表的な作者…四世鶴屋南北
白波物の演行　代表的な作者…河竹黙阿弥
明治に入り、演劇改良運動がおこる
天覧劇（1887年）により、歌舞伎役者の社会的地位が向上
1900年　文学者による歌舞伎脚本の創作…新歌舞伎

現在に至る

-1-

歌舞伎の分類

成立による分類

・狂言系歌舞伎（丸本物ともいう）…人形浄瑠璃の作品を歌舞伎に移したもの
・純歌舞伎…はじめから歌舞伎のために書かれたオリジナル作品
・所作事…舞踊を中心とするもの

内容による分類

・時代物…中世以前の公家・武家社会で起こった事件を扱った作品
・世話物…江戸時代の庶民社会で起こった事件を扱った作品
・舞踊…舞いと踊りを中心とするもの
・新歌舞伎…狂言作者ではない、外部の劇作家の創作した作品

歌舞伎の演目

鬼揃

宝暦十二年（1762）の秋、鬼の棲る家近に鬼が立っている。その鬼は実は鬼の精で、年わかい恋に心を惑ましている。鬼は白無垢姿から町娘の姿となって舞い、狂む自分の心を表現する。最後には鬼の姿となり、苦しみのあまり倒れ込んでしまう。

矢の根

享保十四年（1729）、江戸で初演。歌舞伎十八番の一つ。吉井の滝で矢の根を研いでいた曽我五郎時宗は、定月のあいさつにもらった宝剣を枕にひいてうたた寝をする。その夢に兄の十郎祐成が現れ、父の敵・工藤祐経に襲われたので、駆けてほしいと言う。目覚めた五郎は大磯見りの場を導って、兄を駆けに急ぐ。
※「矢の根」は、矢の先のとがった部分のこと

忠臣蔵大序段来（師直の館）

近松門左衛門作『忠臣の鬼節』（宝永元年 1711、大坂で初演）を改作し、寛政八年（1796）に大坂で初演。鬼節師直の忠兵衛は、新町の遊女梅川と恋仲であるが、金がない。ある日、客からの金を預かったまま、新町へ行くと、外出中の八右衛門が来て、忠兵衛の留口を言い、申渡する。腹を立てた忠兵衛は、預かり金の封を切って梅川を身請けし、新町を去って故郷の大和へ向かう。
※「鬼節」は、文書・金銭・物品を運ぶ仕事、またはそれをする人のこと

-2-

※この他に、写真や浮世絵などの入った資料を配付する

2．学生の関心

学生の受講以前の古典芸能体験や関心のありかを知るため、第１回目の授業時に質問票を配り、次の項目について答えてもらっている。

1．あなたはこれまでに日本の古典芸能を見たことがありますか。
　「ある」と答えた人には、その芸能は何か、どこで/どのように見たか　と続く
2．あなたが興味をもっている芸能や時代は何ですか。
3．授業への希望

この数年の回答をまとめたものが下の表である。同様の質問は秋学期、春学期ともに行っている。ただし、春学期には10月に来日して半年を過ごす中で、本センターの行事として、あるいはホストファミリーに連れて行ってもらう機会をもつ学生もある。日本で実際の古典芸能を体験する前の様子を示したいと思うので、ここでは秋学期（来日すぐの時点）の回答だけを挙げた。

	2007	2008	2009	2010	2011	2012
回答数	**14**	**12**	**13**	**33**	**25**	**24**
古典芸能を見たことがある	**9**	**11**	**7**	**22**	**15**	**19**
自国（劇場）	2	5	1	2	1	4
（授業）	1	0	0	3	5	4
（テレビ・インターネット）	4	4	5	9	9	7
日本（劇場）	2	4	2	5	2	3
古典芸能を見たことがない	**5**	**1**	**6**	**11**	**10**	**6**

※古典芸能を見たことがある場合、その場所を尋ねているが、無回答や複数回答があるため、内数と回答総数は必ずしも一致しない。

年度による違いはあるものの、表からは半数以上の学生はすでに何らかの形で日本の古典芸能に接したことがあることがうかがえる。回答記述の中で、受講理由として、自国で古典芸能を日本文化の一つと知り、興味をもったので受講する旨を述べる学生も多い。その自国での鑑賞にあたって、劇場で見ることができるかどうかは、それぞれの国による違いが大きく表れる（日本側、外国側それぞれの問題がある）が、これまでのところ、学生が芸能を目にする機会が最も多いのは、テレビやインターネット上の映像である。そうした映像の一つひとつは概して短いものであり、決してそれぞれの芸能の様子全体がわかるものではないが、興味をもつ、そのきっかけとしては有効なメディアとして機能しているようである。また、いずれかの時点で日本留学の経験のある学生は、日本で見たことを述べており、その場合は、すべて劇場で見たとの答えであった。留学プログラムの中で設定された鑑賞会などと思われるが、劇場で見られるのは非常に恵まれた機会といえるだろう。

質問１の中では、自国・日本を問わず、これまでに見たことのある芸能を尋ねているが、これは、能、文楽、歌舞伎との回答がほとんであった。狂言や落語は、ゼロではないが、きわめてまれである。その他に見たことがある芸能として、わずかではあるが、日本舞踊や茶道という回答が見られた。

質問２の関心のある芸能については、ほぼ全部にわたっている。

質問３の授業への要望としては、「古典芸能に関する知識を得たい」ということに加え、「本物を見てみたい」という意見も多く見られる。

次に、授業を進めて行く中で、学生からの反応として、こちらが気づかされた点をいくつか挙げたい。

授業の準備をしているときには、文楽でも、歌舞伎でも、勧善懲悪のヒーローが登場する「時代物」の方がわかりやすいであろうし、学生も楽しみやすいのではないだろうかと想像していたが、（セメスターによる多少の変動はあるものの）ほぼ毎回、「世話物」の方がよかったという学生が多い。江戸時代の、現代とは全く異なる価値観、制度の中で恋に悩み、時には心中する男女の物語などは、その社会背景の理解がなければ鑑賞することは難しいと思われるのだが、学生たちは、そこに描き出される恋愛（とお金）のテーマ、社会と個人との間で苦悶する人々の心情に共感し、理解している（もちろん、私の説明が及んでいない点もあり、近世社会というものを十分に理解していた上でのものではないとは思われるが)。特に、文楽については、物語の内容を通じて、人形劇という形式をもっているが、他の多くの国に見られる子ども向けの芸能ではなく、大人が見るための芸能であることを実感するようである。

授業期間の後半、同一作品を異なる芸能形式で見るときには、「曽根崎心中」ならば、文楽、歌舞伎、映画の順で、「土蜘蛛」なら、能、歌舞伎の順で見ている。「曽根崎心中」の場合、聞き取る言葉としては、文楽がもっとも難しく、映画では多少古い言い回しもあるが、現代会話と大きく異ならないため、かなり聞き取りやすい。しかし、三つの芸能を見比べたあとの学生の反応は、毎回、一番よかった作品は文楽であるとする学生が圧倒的に多く（70%くらい)、歌舞伎と映画は残りの半分ずつくらいである。言葉よりも物語自体が学生の理解を進めているということだろう。文楽がよかったとする理由には、人形の姿が美しいというものが多く（このころになると人形遣いが気になるという意見も減っている)、同じことを逆から表現していると思われるが、歌舞伎や映画ではリアルすぎてイヤだったという声が出てくる。文楽の方が物語世界を純粋に表現しており、歌舞伎・映画は人間のもつ生々しさが物語の本質の提示にあたって臭み（？）になっていると見られているようである。

一方で、歌舞伎や映画の方が表情の演技があって気持ちがわかりやすいという意見や、映画は音楽の使い方、クローズアップなどの映像の切り替えで注目させられるという意見もある。それぞれに首肯される意見であると思われ、見比べることによって、特徴をつかんでもらいたいというこちらの意図はまずまず達成されているのではないかと思う。

3．学生からの要望と対応

学外見学

学生への質問3の回答に、「本物を見たい」という希望の多いことを述べた。その要望に応えるべく、この授業では、教室でのビデオ・DVDによる芸能鑑賞だけではなく、受講生だけを対象として、実際の舞台を見学（鑑賞）する機会を設けている（2010年度秋学期から)。ただし、本センターの年間行事として行われる芸能鑑賞会に含まれる文楽と歌舞伎については、そちらに参加してもらうこととし、授業で行う学外見学は、能・狂言などの公演を選んでいる。これまでに訪れたことがある舞台は、山本能楽堂、大槻能楽堂、先斗町歌舞練場、弥栄会館などである。山本能楽堂の場合、大阪ナイトカルチャー事業の「上方伝統芸能ナイト」に参加することが多く、二時間ほどの間に、能舞台の上で、能・狂言、落語といった芸能だけでなく、授業の中では扱うことのできない講談や浪曲、上方舞、女道楽、お茶屋遊びなども鑑賞（体験）で

きる。期末のレポートに、そうした学外見学での芸能を取り上げる学生もいる。芸能は何よりもその実際の舞台を見ることによって、全体としての雰囲気、おもしろさなども感じられるものであるので、大切にしてゆきたい機会である。

スクリプトの提供

実際に授業を進めて行く中で、鑑賞する映像のスクリプトがほしいとの意見が出されることがある。しかし、これに対しては今のところ、応じていない。

能・狂言、文楽、歌舞伎、いずれも舞台上の言葉は古典語であり、それを文字として提供しても理解は困難であろうし、現代語訳では分量が増える上に映像音声とは異なるものとなってしまう。また文字がある場合、そちらに気を取られて映像（舞台）そのものを見ることがおろそかになるかもしれない。そうした理由から、スクリプトの提供は行っていない。使用するDVDに字幕が付いている場合には現代語訳版を示すようにしているが、実態として、10〜15分程度の映像を見る前に、その内容を説明して該当場面を見せる方法が有効であるように思われる。

以上、ここでは「古典芸能鑑賞入門」授業の実施方法を報告するにとどめ、より効果的な教育方法の模索については機会を改めて考えてみたい。

（しばた　よしなり　本センター准教授）